

レンゴー株式会社



企業レポート

松浦利弘*

1. 会社概要

名称 レンゴー株式会社
英文名 RENGU CORPORATION
本社 〒541 大阪市中央区平野町3-5-12
〒100 東京都千代田区内幸町1-1-7
代表者 取締役社長 長谷川 薫
設立 1920年(大正9年)5月2日
資本金 214億1600万円
売上高 2427億円(1992年度)
従業員数 3685名
事業内容

1. 紙・加工紙・ダンボール・紙器・不織布・
接着剤・粘着テープ・軟包装・セロファン・
フィルムなど包装関連製品の製造販売
2. 医薬品・化学薬品など合成化学やバイオ
技術を利用した化学品などの製造、販売
3. POPやディスプレイツールなど販売促
進広告に関する企画、製造、販売
4. 自動包装機械および製紙・ダンボール製
造機械の開発、販売
5. その他、倉庫・不動産事業などや上記に
付帯・関連する一切の業務

2. ダンボールの誕生

「ダンボール」—みなさんがいつも身近にご覧になったり、手に触れられたりされている製品ですが、さて、この「ダンボール」は、一体何語でしょうか? とお尋ねすると、ほとんど



包装技術センター

の方はご存知ありません。

実は、「ダンボール」はレンゴーの創業者である井上貞治郎が自ら生みだした製品につけた商品名であり、従って日本語です。

ダンとは紙を貼り合わせた段のこと、ボールはボードのなまり。ちなみに、英語ではダンボールのことを corrugated board といいます。

ダンボールが世に出たのは、1909年(明治42年)、今からもう85年も前のことになります。井上貞治郎は、流転の人生遍歴の後、29歳の時に東京の下町の小さな平屋の6畳間で、新しい包装資材の開発を夢見て、来る日も来る日も紙と格闘、失敗を繰り返した後に、ついに軽くて丈夫、しかも折り畳めてリサイクルできるダンボールを完成させたのです。

以後、ダンボールは、それまで利用されていた木箱にとってかわり、物流包装の主役となりました。

3. 会社の沿革

1920年(大正9年)、聯合紙器株式会社を設立、「すべての品物をダンボール・ケースで」という創業者の想いは、製品の品質を向上させ、新しい需要を掘り起こして、ダンボール産業を形作って行きます。



*Toshihiro MATSUURA
1933年1月9日生
1957年大阪大学法学部卒業
現在、レンゴー株式会社、常務取締役
TEL 06-202-2371

1972年(昭和47年)、現在のレンゴー株式会社に社名を変更して、ダンボール事業を柱としつつ、内装包装資材や包装機械・システムの開発販売など、総合包装企業を志向した事業展開を図ってまいりました。

近年、海外に生産拠点を移されるユーザーと共にレンゴーも海外への事業展開を進めています。特に、東南アジア地域ではすでに4ヶ国(シンガポール・タイ・マレーシア・インドネシア)に9つの合弁工場が稼働しており、引き続き今回中国の北京・大連でダンボール・紙器事業計画を具体化しました。

レンゴーの技術開発は、次の3つの部門で推進しています。

研 究 所…大阪と福井の2ヶ所にあり、
包む素材の開発を中心に、基礎研究・応用研究を行っています。

包装技術部…東京に包装技術センターをもち、デザインを含めた包装の形態の企画・設計・包装試験などを行っています。

技 術 部…紙・ダンボールの生産の省力化、効率化を図るための機械・システムの開発を進めています。

4. ダンボール事業の特徴

ダンボールという製品および事業の特徴として、次の点をあげることができます。

1. 木材という生きた原材料を元に製品加工し、それを再び原材料(古紙)に戻して繰り返し利用する。
2. 使用される分野が偏らず、非常に広い。
3. 地域密着型の産業であり、ユーザーに近いところで製造・販売活動を行う。
4. 多品種の製品を極めて短い納期で生産し、納入する。

木材資源は、土と水と日光によって一定の周期で確保でき、しかも木材を原材料とした製品は、リサイクルが可能。また捨てたり、燃やしたりする場合も比較的公害問題を起こしません。しかし、一方で生きている木材から作られる

紙・ダンボール製品は伸びたり、縮んだり、品質を維持していく上では苦勞が伴います。

ダンボールはあらゆる製品を包みます。食品、飲料、青果物、繊維、医薬品、機械部品等々。

レンゴーが直接お取り扱い頂いているユーザー数は約7,000社、ダンボールの需要動向は世の中の消費傾向を敏感に感じとります。

宅配便や花のギフトパッケージなどは、ここ数年急成長した分野です。

包む品物がこのくらい多様になりますと、パッケージにもいろいろな工夫が施されます。見た眼には何の変わりもないダンボールに、鮮度保持、防錆、導電性などの技術が加えられています。ユーザーのニーズに応じて行くことが即ちレンゴーの包みの技術を磨き、蓄積して行くことになるわけです。

レンゴーの工場は、国内に34ヶ所(製紙・化成品7、ダンボール24、紙器3)あります。

特にダンボールの場合は、すべて営業部門と生産部門を一体化して、テリトリー内のユーザーからの要望にスピーディに対応する体制をとっています。

また、それぞれの地域社会の一員として、ささやかであっても心のこもった地域への協力を心掛けております。

多品種・小ロット・短納期は今や日本の産業界の常識となっていますが、ダンボールは2～3日の納期で、各工場において毎日300～400種類の製品を造り、ユーザーへ納入しています。

早目に注文を頂いている製品であっても先行生産をせず、余分な在庫を持たずに、納入日時に合わせて日々計画・生産・出荷を行って行くためには、各担当部門の業務遂行レベルの向上に加えてコンピューターによる自動化が必要です。

5. 三田新工場の建設

以上のようなダンボール事業の特徴を踏まえ、長年の生産技術の蓄積と工場運営の経験をもとにして、レンゴーは昨年4月兵庫県三田市のテクノパークに21世紀を展望する新工場を建設いたしました。

三田工場は、次のコンセプトにもとづいて設計されています。



三田工場（航空写真）

1. 「環境」についてできる限りの配慮をする。
2. 最適の計画にもとづく高生産性の工場にする。

環境対策は、外部環境と内部環境、それぞれについていろいろと工夫しています。

三田テクノパークの周辺は、緑の多い地域です。工場敷地内に44,000本の植樹をしており、数年先にはまわりの自然と調和した緑の工場になるはず です。

工場内は、機械の色・採光・換気・防音・空調など、従来のダンボール工場では考えられない環境整備をしています。

高い生産性・高い品質の維持は、最新の設備だけではなく、工場の従業員がいかにか気持ちよく働くことができるか、にかかっているという考え方で、生産現場と事務所・福利厚生棟とを分離しました。食堂は1階の円形のフロアーになっており、窓からまわりの緑を楽しみながら食事ができるようになっています。

工場から車で約25分離れた独身寮も思い切った良い施設にしました。

バス・トイレ付きの広めの個室が30室、VIPルーム、会議室、ラウンジ、テニスコート。研修会場としての利用も可能です。

CIMとは、コンピューターによる統合生産管理システムをいいますが、レンゴーはそれを三田工場で具体化しました。

これまでレンゴーは、ダンボール生産機械およびラインの省力化・自動化等の技術開発を絶え間なく進めてきました。

一方で、「必要なものを必要な時に、必要なだけ生産する」という考え方で、受注から生産

計画、出荷手配までコンピューターで作成し、現場に指示するオーダーエントリーシステムを自社開発して全工場に導入してきました。

これらの技術をつなぎ合わせ、関連づけて行くことによって、納期にもとづいて配車計画と生産計画が作られ、紙・インク等手配はもとより機械のセットも自動的に行われます。機械に取り付ける木型や版もコンピューターの指示で無人で機械のそばまで運ばれてきます。

当然のことながら、事務所で生産現場の進捗状況が把握できますので、時間遅れ・上がり数量不足などへの対応が迅速になされます。

このように工場の受注・生産・出荷情報を一元的に管理し、全体の効率化を図るシステムをIPPAC（アイパック、統合生産管理システム）と呼んでいますが、この三田工場で高いレベルのシステムに完成させて、全工場に導入して行く計画です。

三田工場—優れた環境と最新の設備・システム—企業の取り組みとしてはもちろん投資額にも限度がありますが、ダンボール産業は今ここまで来て、そして、これからの工場はこうありたい、そういう気持ちのこもった新工場であると自負しております。

6. 経営理念

最後に、レンゴーの経営理念をご紹介します。この稿を締めくくらせて頂きます。

「風格と文化を感じさせる企業を目指す」

「社会の尊敬と信頼を得るに足る規模と収益を目指す」

そのためには、

1. ユーザーに高い品質とサービスを提供する。
2. 公正な取り引き姿勢で公正に行動する。
3. 株主に対して十分な還元を行う。
4. 従業員にとって魅力ある労働条件を実現する。
5. 社会への貢献を行う。

紙が素材として持つ優れた特性を生かしながら、あらゆる包装の分野において、社会のお役にたてる企業として成長・発展できるよう、今後とも努力してまいります。

以 上